



清朝青海ホシュート部政策史研究

著者	岩田 啓介
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7195号
URL	http://hdl.handle.net/2241/00131994

清朝青海ホシュート部政策史研究

岩田 啓介

本論文は、17 世紀中葉に青海地方に進出して約 1 世紀の間チベット王を輩出し、清朝・ジュン=ガル・ダライ=ラマ政権の狭間で、ジュン=ガルの潜在的同盟勢力として、かつダライ=ラマ政権の護持者として、チベットを中心とする内陸アジア情勢に影響を及ぼしたオイラトの青海ホシュート部に対して、清朝がいかにして介入し支配下に編入したのかを、清朝の政策と青海ホシュート部内の首長間関係との相互作用に着目して解明するものである。本論文は、序章と結章のほか、5 章から構成される。

序章では、本論文の前提となる認識を以下のように確認する。清朝の支配下に編入される以前の青海ホシュート部は、ジュン=ガルやダライ=ラマ政権と結びついて内陸アジア情勢を左右する大事件を起こしてきた。青海ホシュート部の清朝への編入は、地域社会の再編にとどまらず、チベットや東トルキスタンを含む清朝の世界帝国への発展を実現した重要な要素であった。先行研究が青海ホシュート部を清朝の外藩、或いはチベット史の一部として論じる場合が多かったのに対して、本論文では、チベットのハンを輩出して青海地方で支配を展開した青海ホシュート部の特質に注目し、その特質を喪失させた清朝の政策過程を明らかにするという視座のもとで分析する。そのため、本論文は清朝の青海ホシュート部政策という視点から、青海ホシュート部の個別の首長間関係を重点的に分析し、清朝の政策との相互作用の解明を試みていく。史料としては、清朝と青海ホシュート部との間のモンゴル文・満文の往来文書『清内秘書院蒙古文檔案匯編』『清内閣蒙古堂檔』や、「康熙朝満文硃批奏摺」「軍機處満文録副奏摺」等の清朝の官員による満文・漢文の奏摺等の近年利用可能となった清朝史料に加え、チベット文の高僧伝や仏教史・寺志等を併用する。また、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』と『パクサム=ジュンサン』における青海ホシュート部の系譜の異同を提示し、首長間関係の把握には、系譜に対する分析が必要となることを指摘する。

第一章「成立初期青海ホシュート部」では、17 世紀中葉の青海ホシュート部と清朝・ダライ=ラマ政権との関係を検討し、成立初期の青海ホシュート部支配の特質を提示する。清朝と青海ホシュート部との間の本格的交渉は、1656 年におけるアムド地方の境界画定であった。そこで清朝は、河州から肅州に及ぶ広範囲の内地に居住し、現地の有力チベット仏教寺院と経済的・政治的・宗教的に密接な関係にあったチベット人部族を青海ホシュート部の所属として承認した。青海ホシュート部は、これらの部族の頭目であるナンソを通じて添巴と呼ばれる税を徴収し、その一部を納入することでダライ=ラマ政権と経済的に結びついた。これらの部族は、明代には土司に相当する関係を築いて明朝の対モンゴル防衛を担ったものの、明末にグーシ=ハーン率いる青海ホシュート部が進出して統属関係を構築し

たため、清朝はそれを承認せざるをえなかったのである。また、成立初期においては、ダライ=ラマ五世の斡旋のもとで編制された左右翼を基礎とし、チベット王たるハンと青海の総管が並立する二極構造が存在した。ただ、グーシ=ハーンの子ダヤン=ハンと孫ダライ=ハンの時期に、ダライ=ラマ五世の政治力拡大によりチベットのハンは形式的存在と化し、実際にはグーシ=ハーンの第 6 子ダライ=バートル、その死後はグーシ=ハーンの第 10 子ジャシ=バートルが青海の総管として青海ホシュート部全体を統率した。青海ホシュート部の成立当初において、清朝はその内部には介入できなかったのである。

第二章「ガルダン戦争終結後の清朝の青海ホシュート部への介入と首長間関係」では、17 世紀末に清朝が青海ホシュート部と本格的に接触し、部内がラサン派と反ラサン派に分裂する過程を明らかにする。清朝は、対ジューン=ガル戦略上の重要性に鑑みて、1697 年に青海ホシュート部首長層に入朝を指示した。青海ホシュート部首長層は、当初は入朝を躊躇していたものの、1697 年末にジャシ=バートルら一部の首長がチベット人部族の国師やナンソらとともに入朝したため、清朝は青海ホシュート部首長層に親王以下の爵位を授与した。この時点の清朝の政策は、分裂を意図したものではなかったが、清朝との接触によって部内では徐々に派閥が形成された。1703 年にチベットのハンに即位したラサン=ハンが、1705 年に摂政サンゲ=ギャムツォを殺害してチベットの政治的実権を掌握すると、清朝は彼に新たにハン号を授与してその権威を追認し、ラサン=ハンによるチベットの安定を目指した。清朝の支持を得たラサン=ハンは、前代の総管ダライ=バートルの孫である郡王エルケ=バルジュールとの連携を進めたため、総管ジャシ=バートルが反発し、チベットのハンと青海の総管という二極構造の対立が浮き彫りになった。その結果、1706 年にジャシ=バートルらがエルケ=バルジュールを死に追いやったことで、部内のラサン派と反ラサン派の分裂が深刻化し、ジャシ=バートルら反ラサン派はジューン=ガルとの連携を進めることとなった。

第三章「新ダライ=ラマ六世擁立に伴う政治過程」では、18 世紀初頭に 2 人の「ダライ=ラマ」が並立した過程を政治的抗争として考察する。1705 年にラサン=ハンは、ダライ=ラマ六世を廃位して新たに別のダライ=ラマ六世を即位させたが、反ラサン派の反発によって清朝への依存を深め、清朝もジューン=ガルとの関係が疑われるとはいえラサン=ハンを支持していった。そして、1710 年の新ダライ=ラマ六世冊封に関する議論では、清朝は青海ホシュート部首長層を実質的に介入させなかった。また、ラサン=ハンは政権運営のための経済力を必要とし、東チベット出身の化身を新ダライ=ラマ六世として擁立して、それを通じて反ラサン派が分有する東チベットへ権力を浸透させ、現地の公課を得ようとした。清朝は、ラサン=ハンの求めに応じて反ラサン派に対して新ダライ=ラマ六世に公課を納めるよう指示した。しかし、反ラサン派も 1714 年に東チベットのリタン出身の化身をダライ=ラマとして独自に擁立し、新ダライ=ラマ六世への公課の納入を停止させた。このように、ラサン=ハンと反ラサン派の対立に清朝の介入が加わり、東チベットの公課をめぐる 2 人の「ダライ=ラマ」が並立する異例の事態となったのである。

第四章「ジャシ=バートル死後における反ラサン派の崩壊」では、青海ホシュート部の清

朝への編入を、清朝の介入による反ラサン派崩壊の側面から論じる。反ラサン派のチャガン=ダンジンと総管ロブサン=ダンジンは、ジューン=ガルとの連携を背景に 1714 年に独自のダライ=ラマを擁立して反清的行動を具体化しようとしたが、反ラサン派の多くは清朝との軍事的対立までは望まず、その行動には同調しなかった。反ラサン派の分裂を看取した清朝は、軍事的圧力を加えて 1716 年にリタンの童子を青海のクンブム寺に移送して管理下に置き、リタンの童子に対する青海ホシュート部の主導権を失わせた。これと同時に清朝は、ラサン派首長への支援に加えて、統率者不在を名目として左右翼に複数の盟長を任命して権力の分散化を進めた。他方、1717 年にジューン=ガル軍がラサン=ハンを殺害して新ダライ=ラマ六世を廃位したが、清朝はこれにチャガン=ダンジンが関与していたことを察知し、郡王への封爵やジャムヤン=シェーパー一世の冊封など破格の待遇によって懐柔した。清朝は、1720 年に青海ホシュート部首長層とともにジューン=ガル軍を中央チベットから撃退してリタンの童子をダライ=ラマとして即位させたが、その論功行賞でロブサン=ダンジンの不満が決定的となり、ロブサン=ダンジンはチャガン=ダンジンへの攻撃を皮切りに「乱」を引き起こした。これは、清朝が進めた権力の分散化によって、総管ロブサン=ダンジンの部内での地位の相対的低下によって生じたものであった。

第五章「服属後の青海ホシュート部」では、服属後の青海ホシュート部に制約を加えた政策として、チベット人部族との間の統属関係の解消、盟旗制の導入、チベットのハンの廃止を取り上げて、清朝支配の浸透の実態を考察する。清朝は、1725 年に青海ホシュート部とチベット人部族との間の統属関係を解消し、それに伴う首長層の困窮に銀両の賞賜などで対処し、首長層は清朝に経済的に依存していった。1730 年末からジューン=ガルとの戦争に突入した清朝は、1725 年に編制したニルを通じて牧地の防備のために青海から兵を動員したが、経済的問題や土司の辺外への進出など、清朝支配による新たな変化に適応しきれなかった弱小首長ノルブが 1731 年に乱を起こした。それを鎮圧した清朝は、改めてニルからの軍事動員によって支配を浸透させていった。また、1731 年にジューン=ガルがラサン=ハンの次子をチベットに送還するという情報を得た清朝は、厳重に防備を展開した。その一方で、翌 1732 年にトルグート部がダライ=ラマにハン号の継承を求めると、ジューン=ガル征討のためにトルグート部との連携を進めていた雍正帝は、ダライ=ラマにハン号授与を強く指示した。このようにして、青海ホシュート部とチベットとの関係を清朝は徹底的に断絶させる一方で、銀両などの賞賜によって青海の地に繋ぎとめながら、ジューン=ガルとの対立の中に青海ホシュート部を埋没させたのである。

結章では、各章の内容を整理し、以下のように総括する。第一に青海ホシュート部を崩壊させた複合的要因として、1) チベットのハンと青海の総管という二極構造がラサン=ハンの登場により浮き彫りになり、中央チベットと青海の二極で対立を生じさせ、2) 青海の地政学的重要性に加え、ダライ=ラマと部内の権力が政治的に結びつくことで、清朝やジューン=ガルの介入を招いた。第二に、清朝の青海ホシュート部政策の特徴として、青海ホシュート部内の対立においてダライ=ラマと結びついたチベットのハンを清朝は一貫して支

持したが、それが総管側の不満を招き、二極構造の対立を激化させた。ここにジューン=ガルへの対抗という軍事上の要素が加わり、最終的に清朝は、権力の分散化、チベットのハンの廃止、チベット人部族との間の統属関係の解消を実現し、青海ホシュート部支配の特質を喪失させた。このようにして、モンゴルとチベットの接点に位置する青海ホシュート部をチベットから政治的に断絶させ、モンゴル支配の枠組みに再編することで清朝は統治を可能にしたのである。このような、対象となる社会の支配層や統属関係を解体・再編して展開した支配は、在来の支配層や統属関係を残存させて、それに応じて統治を多様に変化させたとする近年の清朝国家論の見解とは異なり、拡大期の緊迫した情勢のもとで展開した政策から導き出される清朝の新たな国家像を提示するものである。